

—第35編— ストラスブール^{*1}、アルザスの葛藤と止揚

1989年ベルリンの壁が崩壊し、第2次大戦後分断された東西ドイツはドラマチックに45年後の「再統一」を果たした。しかし、欧州における激動の歴史の陰に隠れて、ドイツの近代的に統一された国家体制が、第二（1871〜1918）、第三（1933〜1945）帝国のように、比較的短い期間でしかなかったことを忘れがちである。そして、強力な中央集権のシステムを持つ隣国フランスとは対照的に、ドイツは今も16の独立した権限を持つ州区の連邦制を敷いている。かつて、ゲルマン系の人々が北から大移動してきた同一言語圏にも拘わらず、長期間にわたって周辺への強国による相次ぐ干渉や、宗教的対立等によって小国群に分断された。また、強い経済基盤を持った自由都市群も併存する、そんなパッチワークのような地域であり続けた歴史的背景があるからだ。そして、それぞれの地域には、その場所性や地域性を反映した方言や生活文化が連綿と引き継がれてきたのである。

その中でも、中世以来何度も国境が東西に移動し

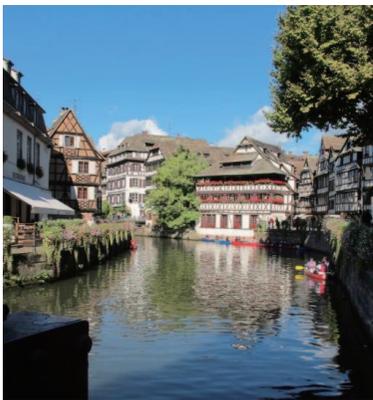


写真35-1 旧市街地プティ・フランスの一角

*1
Strasbourg: 人口約
27万のアルザス地域圏
首府

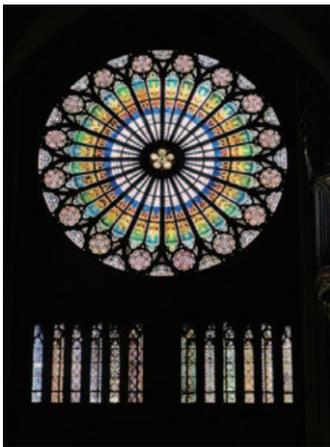


写真35-2 ミュンスター寺院のバラ窓

たアルザス・ロレーヌ^{*2}地方では、ライン川が隔てた両民族の生活文化が触れ合った。地続きの国境を持たない島国の私たちにとって、このような履歴のプロセスを俄かに理解することは困難だ。日常に滲み出るそんな異文化の違いと融合に触れる度に、人間の遺伝子の力や民族の強固な性（さが）と同時に、しなやかな柔軟さを思う。それは、時に神秘的でさえある。すなわち、なんらかの理由で異なる生活文化を持つ他民族が入り込んだり、財力が蓄積されたりすると、そこに新たな技術や美意識との葛藤と融合が始まる。ヨーロッパ大陸のように、陸続きであらゆる争いや交流が繰り返されてきた歴史の過程で、そのような事例は枚挙に暇がない。

今やベルギーのブリュッセルと並んで、EUの拠点施設が置かれるアルザスの中心都市ストラスブルグである。しかし、そこに至るまでの葛藤と止揚のプロセスは、我々の想像を絶するものであったに違いない。だからこそ、フランス文化とドイツ文化が当たり前のよう融合したまじの風情を醸し出しながら、豊かに、したたかに、そしてしなやかに我々を迎え入れてくれるのである。

*2
Alsace-Lorraine

*3
Zouffl.: スイスアルプスに端を築き北海に注ぐ、延長1,233kmに及ぶ国際河川



写真35-3 まちかどのグラフィティ